

■□ 現地報告Ⅱ

震災から10年、地域と共に歩んだ信用金庫の復興支援の取組み

井手 治典 (気仙沼信用金庫 常務理事)



気仙沼信用金庫の井手でございます。皆さん、よろしくお願いいたします。

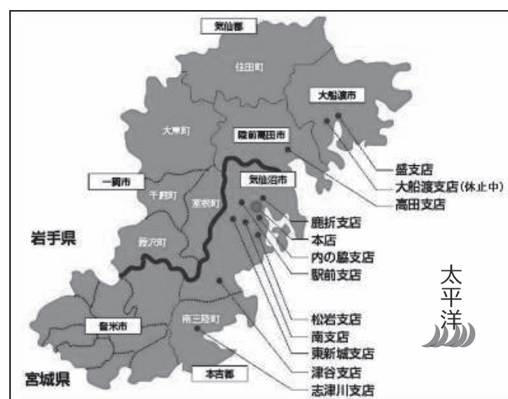
まず表紙ですが、「地域の皆様とともに歩み、地域の皆様とともに発展する」という表題下部のコメント、これは当金庫の基本方針でございます。紹介がてら掲載しました。次に、気仙沼がどこにあるか、詳しく知らない方もいらっしゃるかもしれませんので、地図を載せました。気仙沼は宮城県と岩手県の県境にございます。ほとんど岩手県に接しています。営業エリアは、気仙沼市のほかに岩手県の大船渡市、それから奇跡の一本松がよく取り上げられる陸前高田市、実は陸前高田市は隣町ですが、それから南のほうに南三陸町がございまして、主にこの4市町をエリアにしております。

気仙沼がどういうところか、恐らく皆さん、漁師の町だと思われていると思います。ちょっと詳しく話しますと、世界三大漁場の1つである三陸沖に面しています。残り2つはノルウェー沖とカナダのニューファンドランド沖と言われておりまして、気仙沼は、わが国屈指の水産都市でございます。それから、これはあまり知られていないかもしれませんが、生鮮カツオの水揚げが、24年連続日本一です。その他サンマとかフカヒレも有名です。それからメカジキですね。今が旬のホヤ、ワカメも高いブランドです。資料に載っているのは気仙沼市のキャラクターで、ホヤぼーやと言いまして、ちょっとかわらしいんですけど、サンマの

剣を持っています。ホタテのベルトに、マントが実はサメ革なんです。そういうホヤぼーやというゆるキャラがありますので、皆さんよろしくお願いします。

漁業も盛んですが、それに加えて水産加工業もかなり多くて、さらにそれに関連する仕事というの、すごくあります。具体的には、冷凍や冷蔵施設、それから氷屋さんですね。水揚げされた魚を冷やす氷屋さんです。それから魚を入れる函屋さんです。運送物流は当然ですが、漁船など船舶がたくさん入ってきますから、船舶修理の会社もございます。それから陸に上がって漁師や船員さんが休憩しますので、飲食したりちょっと遊んだりする飲食サービス業というのも結構ありまして、水産業に関連する多くの事業が地域経済を支えている、という所です。

こういうなかで、気仙沼信用金庫は活動



2021年3月末現在

していますけれども、われわれ自体の復興というのも実は大きなテーマでした。12店舗あったなか、震災で全壊7店舗、半壊1店舗、床上浸水2店舗の被害を受けました。わずか2店舗からスタートしましたが、今現在どういう状況かと言いますと、12店舗中11店舗が通常営業しております。残り1店舗は再建中でして、この9月に完成予定です。10年経ってようやく店舗の復興が完了するという状況です。本日は、3店舗の震災時と現状の写真を載せています。本店と鹿折支店、それから陸前高田にある高田支店です。本店には、家屋がぶつかっています。鹿折支店には漁船が流されてきて、店舗のすぐ手前で止まっている。こんな状態から再建しましたけれども、これもよく見てほしいのですが、この写真、実は先月撮りました。再建したときの写真ではなくて、3つとも先月の写真です。再建したのはいいのですが、まだ周辺には更地だとか空き地が多いことが分かります。震災前は建物がたくさんあって密集



鹿折支店 被災時



2018年3月に再建された鹿折支店の現在の様子

していました。再建したとは言っても、まだ実はこういう状況です。よく、復興は道半ばと言われますが、写真で見ても、実は現状こんな感じだということをご理解いただければと思います。

地域全体の復興状況ですが、インフラ関係は、ある程度進んできております。ただし、防潮堤はまだ60パーセント程度で、復興道半ばというところですよ。個人の方の住宅着工は、震災直後から5～6年目位にピークを迎え、今は震災前の水準程度になっています。それから、地域経済においては魚の水揚げ量が大事なポイントになりますが、現状7万トン位で、震災前と比べて約7割まで回復しています。金額も約7～8割近くですが、金額以上に量が大事です。量がたくさん獲れることによって、氷屋さんとか函屋さんも儲かるためです。ですから、量がなかなか獲れないのが現状の課題です。

人口減少も進んでいまして、気仙沼市は現在6万人ちょっとですが、年間約1,000人減っていて、今年度中におそらく6万人を割ると予想されています。観光客は、一時期結構盛り上がり回復したのですが、コロナで直近2020年はガクッと減っております。やはり、観光客が来て交流人口が増えないと、地域経済がなかなか活性化しないという状況です。

こういうなかで当金庫がどういうことをしてきたか、ということですが、震災直後、お客様へ手持ち資金として現金を便宜払いでお支払いしました。いつから行ったかという、震災発生の4日目からです。残された2店舗で開始しまして、行政や近隣の金融機関などの協力を得ながら現金を調達し、真っ先に店舗を開けてお配りしました。色々事情があったかと思いますが、他の金融機関よりもいち早く、当金庫は生活資金

をお配りしたということで、地元金融機関の役目を果たしたのかなと思っています。お客様も通帳や印鑑を流されてしまって、厳格な本人確認ができない状況で、当金庫は職員と面識があるかどうかで本人を確認し、トータル1カ月間で約2億1,000万の現金をお配りしました。なお、後日すべて清算し、未回収はありませんでした。

それから、当金庫は、多くの方々と連携して震災以降の取組みを行ってきました。まず1つ目に、国際NGOのメーシーコープや世界的な半導体企業のエヌビディア社と連携し、多大な協力を得まして、従業員を雇用するための助成など、取引先が再起するための支援を行いました。それから、なかなか借入れしても利息が支払えないお客様も多いので、そういったところに融資金の利子補給を行い、支援の手を差し伸べました。また、三菱商事(株)とも連携しまして、同社の資金を活用しながら、当金庫の取引先に対して出資という形で事業再建の資金を提供していただきました。同社は復興支援の財団を立ち上げ、色々と協力していただきました。出資して配当金を得るのですが、そのお金も地域で循環させるため、気仙沼きぼう基金を設立しています。その配当金を当金庫では、地域活性に取り組む団体等の活用資金に使わせていただいております。

次に、当金庫では気仙沼しんきん復興支援基金という財団を設立しまして、日本財団から5億円の拠出をいただき、融資金への利子補給や、融資が難しいお客様へ助成を行いました。また、専門家派遣や創業スクール、セミナーなどもこの10年間でかなり行いました。創業については、最近3年間でカフェやバー、民泊など、14人の創業を支援しております。

それから、メディアで取り上げられるこ



旅行者見送りの模様

とも多いのですが、「地産都消プロジェクト」というのを東京の信用金庫と連携して行っておりまして、気仙沼の地域のことを東京で売っていく、という活動をしています。そのほか、当金庫では、全国の信用金庫の年金旅行などを誘致し、地域の交流人口増加をサポートしておりまして、これまでに6,712名を受け入れております。ホテルや観光施設で出迎えたり、取引先の商品を買ってもらったり、そういう活動しております。コロナが収束すれば、こうした活動も、またしっかりやっていきたいと思っています。

最後にちょっとPRです。現在「おかえりモネ」が放映されています。気仙沼や登米が舞台ですけれど、そろそろ中盤になると気仙沼が登場してくるので、ぜひ皆さん、見てもらえればと思います。よろしくお願いします。

今回の報告にあたっての振り返りですが、当金庫では単に融資するだけではなく、一緒にお客様と取り組みながら復興を進めてきました。ただ、単独でやるのもなかなか限界があるので、色んな方々とも連携してきたというのが、実態です。活動するにあたっては、支援するとは言ってもやはり資金が必要です。したがって、この資金をどうやって調達するのかというのが大きな課題でもありましたし、そうしたなかで多くの方々に協力していただき、本当に助かったなと思っています。本当に様々な

方々から、感謝しきれないぐらいの熱いご支援をいただきました。この場を借りて感謝を申し上げます。まだ復興道半ばですが、当金庫としては「地元を育て、地元で伸びる」をモットーに、引き続き業務に邁進して参りますので、今後ともよろしくお願いいたします。ぜひコロナが収束しましたら、気仙沼に遊びに来ていただければと思います。本日は、どうもありがとうございました。



気仙沼市観光キャラクター
「海の子 ホヤぼーや」